

デラシネの旗 五木寛之

デラシネの旗

昭和四十四年九月三十日 第一刷
昭昭四十四年十一月二十日 第五刷

定価 三九〇円

著者 五木寛之

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二二一

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

万一落し誤りの場合はおとりかえ致します

デ
ラ
シ
ネ
の
旗

déraciné (仏) 根こぎにされた (形) 根なし草 (名) 国を離れた人 (名)

第一部

一九六八年五月二十九日

3

画面はおそろしくぶれている。プラタナスの街路樹が不意に倒れかかると、燃える車が現れた。警官の隊列が斜めに滑って消える。突然とびこんでくる女の顔と小銃の台尻。ヘルメットの青年たちが波の引くように駆け抜ける。はぎとられた舗道と散乱する敷石。倒れて跳ねあがる少女の白い脚。立ちこめる灰白色の霧の流れ。

「催涙ガスだ」

と、島木が言う。「フランスの催涙弾はすごいぞ。すごい音がする。向うで発射音がするだろ。飛んできてシュルシュル煙を吹きながら敷石の上を滑ってくる。赤い焰をあげて突然ぱつと爆発するんだ。あんなの、まともに直撃くらったらたまらんな」

「ああ」

黒井は煙草に火をつけながら画面を眺めた。これがはたして使えるかどうかを考えているのだった。ニュース番組の一部になら、もちろん使える。だが、それではつまらない。すでに先週の土曜日の国際ニュースでも、一応は流してあるのだ。

「あれだ」

島木が呟く。「ただの警官隊じゃない。CRSってやつだ」

「何だい、そいつは」

画面には脚を開いて立っている男たちの姿が写っている。黒光りするコート。ヘルメットと風防グラス。白いマフラーを襟元にのぞかせ、黒い肘まである手袋をはめている。重量感のあるライフルと鈍く光る拳銃の銃把。

「共和国保安隊とかいう連中だ。おれはよく知らんが、何でも内務大臣直属の特別警察で、軍

隊組織になっている実力派らしい。アルジェリアで活躍した人殺しのプロが沢山いるとか言っていた。そこらの普通のお巡りとは違うね。目付きが違う。変に落ちついていて、笑いも怒鳴りもしない。ガラス玉みたいな冷たい目付きで、じっと見ているだけだ。怖いぜ」

「怖いな」

煙草の煙が背後から流れてくる光線に縋をつくる。手で煙を払いながら黒井はまだ考えていた。十五分の特別番組を作ったとして、いったいどこへ突っ込むか。朝のニュース・ショーであの横柄な元外交官の時局解説者を呼んできて、解説を頼むという手もある。いや、それとも大学の若手の教授と対話をさせるか。本当は三派系の活動家を呼んできて、機動隊員や労働者たちのグループもまじえた若い連中の討論会でもやると面白いのだが。もしそうなれば一時間は無理だとしても、四十五分は欲しい。特別報道番組、ヘバリを遠く離れて、というのはどうだろう。だがそんな可能性はどこにもない。スポンサーがついたとしても、局側でいやがるだろう。

画面にはヘルメットと角材で身を固めた学生の一団が写っている。どこの建物だろう。階段の左側に頬ひげを生やした男の座像がある。少し首をかしげた男性的な顔の男だ。その腕の間

に旗竿がさし込まれ、黒い旗がたれさがっている。いや、黒ではないだろう。黒白の画面なので黒く見えるが、あれは赤旗にちがいない。いや、やはり黒か。あの学生たちの中には、当然アナキストのグループもいるはずだ。黒井は首筋がむずがゆくなるようなもどかしさを感じた。どうしてもっと彼らに近付けないのか。

学生たちはその像の下、階段の下の広場に集っていた。米軍のコートを着ている連中もいればセーター姿の学生もいる。だが、それぞれ手に角材を持ち、ヘルメットをかぶって戦闘的な面構えだ。中には中世の騎士が持っていそうな古風な楯を用意している者もいる。

「だれの像かね、あれは」

「ヴィクトル・ユーゴーと書いてある」

「ユーゴーか。ヘミングウェイみたいな顔じゃないか」

「あいつらがリーダーだ」

島木が指さして言った。

「どれだ」

「いま写ってる。画面の右端——」

「階段で演説してる奴じゃないのか」

「あれは演説係りさ。本当の参謀本部はあそこにいる連中だ。外国人もいる。女はいない。彼らがデモを計画し、指揮をし、学生たちを動かしているんだろう。APのカメラマンがそう言ってた」

「どうしてもっとアップでいかなかったんだ」

「え？」

「どのカットもまるで観光客のアングルじゃないか。バリ五月革命観光大写真といった感じだ。うちのニュース・カメラマンなら、こんなとりかたはしないだろう」

「当り前さ」

と、島木は怒りもせずと言った。薄く生えかかっている口ひげの下に、かすかな笑いが浮んでいる。「おれはそもそも傍観者だからな。カンヌからバリへ逃げてきて、偶然こんな場面にぶつかっただけさ。さっき言っただろ。大体おれはカンヌの映画祭に美人女優の尻をとりに行ったんで、デモにもストにも関係ないんだって。今の流行り文句で言うと、ノン・ポリってのかね。仲間うちでも無思想カメラマンで通ってる。あたしゃ、もともとそういう男でしてね」

黒井は黙って相手のお喋りを聞いている。試写室の中は静かで、暗い。冷房のきいた室内にいるのは、二人だけだ。画面にはまだ学生の集会が延々と写っている。

「どうした？」

と、島木がたずねた。黒井が急に体を乗り出して、何か口の中で呟いたからだった。

「いや」

黒井は首を振って、椅子に背中をもたせかけた。「ちょっとその——」

「どうだろう、使えますかね」

黒井は答えなかった。さっきのヴィクトル・ユーゴの像みたいに、頬に指をあてて黙っている。

「値段のことはまかせろよ。とにかくいくらにでもなればいいんだ。何しろ出発前にバトロネから個人的に借りた分だけでも返さないと——」

「ちょっと待ってくれ」

黒井は立ちあがって振り返ると映写室の方へ大声で怒鳴った。

「ストップだ。とめろ」

「駄目かね」

島木の声が哀願の調子をおびた。「十五万、いや十三万でもいい。Qテレビの田宮氏は十五万出すと言ったんだが、おれはあいつには売りたいくないんだ。本当は喉から手が出るほど欲しいくせに、こっちの足もとみて義理で買ってやるみたいな物の言いかたをしやがる。だからおれは——」

「待ってくれ」

黒井は大股で壁際へ行くと、映写室へ言った。

「今のところ、もう一度回してみてくれないか。そうだ、頼む」

彼は席へもどって来ると煙草を捨てて、島木の隣りに坐った。不意に電燈がついて試写室の中が明るくなった。

「どうかしたのか」

と、島木がきいた。

「いや。たぶんおれの錯覚だろう」

黒井はしばらく黙っていて、ふと思ひ出したように聞いた。

「あんたが、大学にはいったのは何年頃かね」

「大学？ おれは卒業はしてないんだが」

「いや、入学した年さ」

「さあ。いつ頃かな。なにせ例のへ太陽の季節」が出て騒がれた頃だから」

「昭和三十年か。六全協の年だろう」

その時、室内が暗くなった。スクリーンが揺れて再び学生たちの集会が現れる。カメラはヘルメットと角材の上をパンして、階段の左手を写し出した。五、六人の男たちが何か机を囲んで話し合っている。

「あれがリーダーたちかね」

「そうらしい。だが学生たちの委員会コミテじゃない。今度の学生騒動を実際に指揮してるのは、〇B連中だという噂だった。国際的な学生運動の組織から派遣されたプロの活動家たちさ。あれがそうかどうかは知らんが、とにかく学生たちは、あのグループに一目おいている様子だった」

「……………」

黒井は体を乗り出して画面を眺めた。机をかこんだ男たちの恰好は様々だ。背広を着ているのもしれば、ジャンパー姿の男もいる。短いレイン・コートを着て、烏打帽をかぶった青年もいた。黒井はネクタイをしめ、黒っぽい替え上衣を着た男をみつめ続けた。痩せぎすの竹のような体つきの男で、太い黒ぶちの眼鏡をかけ、カストロ風のひげを生やしている。両手の拳を握りしめ、胸の前で打ち合わせるようなゼスチュアで何か喋っていた。場面が変わった。

「とめろ」

と、黒井が振り返って言った。「すまんが、もう一度いまの所を回してくれ」

「一体どうしたんだ」

島木がたずねた。うん、と黒井はいまいにうなずいただけだった。島木はむっとしたように黙り込んだ。しばらくして黒井が妙に静かな調子でいう。

「報道部の部屋へ一緒に来てくれ。おれの一存で買い込むより、部長に話を通しておいた方がよさそうだ」

「買うのか」

「値段しだいだがね」

と、黒井は言った。その時、スクリーンに再びあの男の横顔が写りはじめた。

報道部長の武田昌平は無口な男だった。服装には無頓着なほうで、いつも筋がとれて膝のつき出たズボンをはいている。一年中どことなく野暮ったい紺の背広を着ている姿は、現職のテレビ・マンというより市役所の古手の職員に似ていた。そう悪くない給料を取っているはずだが、袖口のすり切れたVシャツをのぞかせていたりすることがあって、病身の奥さんを抱えて苦勞しているという噂は本当らしかった。眼鏡の奥の目は一見、気の弱い善良そうな感じだが実際は違った。他人の意見をよく聞く一方、いったん決心するとなかなか妥協しない所もあるしぶとい男なのだ。

いま武田部長は黒井と島木を前に坐らせて、黙って考えこんでいる。指先にはさんだ煙草の白い灰が、洋服の上にこぼれるのを気にも止めないふうだった。しばらくして、

「それを買う必要があるのかね」

と、低い声で言う。

「ええ」

黒井がうなずいて喋り出した。

「NHKやQテレビでは今度のバリの騒ぎを現地取材で送らせています。うちは通信社から買ったやつを、お義理みたいに国際ニュースにはさんただけですからね。この辺で少しまとまったやつを使って、何か特集を組む必要があるんじゃないですか。それに——」

「何だ」

「こっちから人間を送って取材させるのにくらべると、べらぼうに安くつきますんでね」

報道部長は膝の上に落ちた煙草の灰を手で払って、眼鏡ごしに黒井を眺める。

「お前さんも変ったな。予算の心配までしてくれるとはね」

黒井は苦笑して目をそらせた。それに追いうちをかけるように、武田部長が言う。

「問題は金じゃない、そのニュースの質だ」

黒井はうなずいた。ふだんは、うん、とか、いや、とかしか言わない相手が、今日はめずらしく喋っている。

「島木くん、だったかな、そっちの人——」

「そうです」

島木が心配そうな顔で部長を見あげた。武田部長は、いつものぼそぼそした口調で言った。

「あんな、カンヌの映画祭へ行ったんだらう」

「ええ」

「それがどうして——」

「じつはスポーツ新聞で制作している芸能ニュースの取材でローマに行っただけです。例の離婚した東宝のスター女優が、イタリア映画に出るといふんでね。もちろんそれだけが取材の目的じゃありません。途中でカンヌ映画祭の模様をとり、パリでデビ夫人のインタビューをやり、ロンドンでビートルズが新しくやり出した店を取材する予定でした。それがカンヌでの騒ぎでしょう」

島木は、早口で大混乱におちいって中止になったカンヌ映画祭の話をしはじめた。武田部長は黙って聞いている。いや、聞いているのかどうかわからないが、少くとも黙らせようとはしない。

「なにしろゴダール、ルルーシュ、ルイ・マル、トリュフォーと、フランス映画界の若いスター監督たちが映画祭に殴り込みをかけてきたんですからね。たちまち実力行使ですよ。大きく

写っていた女優の顔はくしゃくしゃに歪み、サウンド・トラックの配線は切られるし、カーテンは開かず、結局、上映取りやめ。主演女優のジュラルディン・チャップリン、ご存知でしょう？ チャップリンの娘ですがね。彼女は泣き出すやら、観客席で殴り合いが始まるやら、大混乱の果ての映画祭中止です。日本側では、〈愛の渴き〉を上映するはずだったんですが、これもだめ。そのあげく、乗り込んできてアジッタ連中は映画祭をつぶすや、さっさとイタリア製の高級車で引揚げて行きましたよ。やつら、パリからしこたまガソリンを用意してやって来たんですね。そのとばかりを食ったのがわれわれです。何しろ交通機関はストで動かず、ガソリンは売ってない。みんなほうほうのいでカンスを逃げ出しました。ぼくは知り合いのフランス人カメラマンのぼろ車に頼み込んで便乗させてもらいましたね。パリについた時はもう息も絶えだえです。おまけにえらい運賃を請求されました。ええ、知らない仲じゃないのに、ひどいもんだ」

「なるほど」

「パリへ来てみるとこれがまた大変な騒ぎでしょう。動けやしません。サン・ジェルマン・デ・ブレの安ホテルに泊って、毎日、バスの順番待ってましたよ。ええ、日航がバスを仕立て